



校報

水糸者

No. 1265

元年度・第124号

種小っ子の学び

～「関わり」を通して、学びを広く、深く～

本校の『重点研究教科・領域』は、4月19日付の校報1153号でもお知らせした通り、今年も特別活動と国語科で、研究主題も昨年度と同じ『種小っ子の輝く笑顔の追求～国語科と特別活動の「関わり」を大切に～』です。



先日、特別活動と国語の授業研究会を行いました。最後まで友と関わり合いながら学ぶ種小っ子の姿と『種小っ子の輝く笑顔の追求』のため日々教育実践に励む本校教職員の姿を紹介します。

本校では、子どもの学力保障と笑顔を求めて、それを実現するために「得意な子が満足し、苦手な子がわかる授業」を目指し日々実践を重ねています。そのために「関わり」を授業の中にしっかりと位置付けています。そのような授業は、本校が全ての教科で共通して掲げているめざす授業像になっていくのです。

《本校がめざしている授業の姿》

本校が目指している「得意な子が満足し、苦手な子がわかる授業」となっていくには、4つの条件・視点があります。

- ①精一杯学習をさせてくれる授業（「動く楽しさ」がある授業）となっていたか。
- ②技や力を伸ばしてくれる授業（「のびる楽しさ」がある授業）となっていたか。
- ③友達と仲よく学習させてくれる授業（「集う楽しさ」がある授業）となっていたか。
- ④何か新しく発見させてくれる授業（「わかる楽しさ」がある授業）となっていたか。



2年1組の学級活動の様子。
〔授業日…11/22〕

【活動する時間が保証され、子ども達がじっくり考えている場面】

45分間、意欲や思考が継続されるための「共通の土台」に全員をしっかりと乗せられるかどうか、本校の授業の命綱ともなります。



6年1組の国語科の様子。
〔授業日…12/ 2〕



2年1組の学級活動の様子。
〔授業日…11/22〕

【自分の考えを広げている場面】

わかったことをノートに書くことや友達に教えることなどの、発信（アウトプット）によって「わかった」がより一層深く広くなっていきます。



6年1組の国語科の様子。
〔授業日…12/2〕

【友と関わり合っている場面】

友と関わり合いながら、理解を広め、深めていっています。良好な友達関係も本校の授業の命綱ともなります。



【子どもに寄り添いながら、学習の進行状況や困り感を把握している場面】

本校のめざす授業が成立するためには、45分間の全てが「教師対子ども」の『一斉指導』では成立しません。教師が黒板から離れずに45分間授業を進める「かまぼこ授業（黒板に張り付いたままの授業という意味）」でも成立しません。担任が発する1つ1つの問いに対して、子ども達がどのように反応し、正しく学習を進めていっているかなどを、「足」を使い、確認し続けています。



友と関わる事で、知らなかった事に気づいたり、できなかった事ができるようになってきます。そうすると、子ども達はますます生き活きと学びます。



黙々と課題に取り組む種小っ子の姿。やる事が分かれば、学ぶ楽しさが分かれば、子どもは黙々と学び出します。



授業後には、指導主事さんと研究主任を交え、授業の反省を行っていた担任。このような真摯で誠実な姿勢が、種小っ子の笑顔につながっていくのです。

本校が目指している「得意な子が満足し、苦手な子がわかる授業」が成立するための4つの条件・視点は、実は本校の校風の1つでもある「わからんときはおしえっこ、うれしいときははしゃぎっこ、こまったときはたすけっこ」とほとんど同じ事です。昭和42年に当時の中村健三校長先生が残されたこの言葉は、50年以上経った今でも輝き続けています。

先行き不透明で予測困難な時代となるであろう、今後ますます輝きを放つ金言です。子どもの笑顔を求めて今日も試行錯誤と切磋琢磨を続ける種小です。